藝苑捃摭

特別
へ13
3637

昭和三十二年六月八日
宮川愛象氏寄贈

13
637

文政八年刊

序

柳亭の風来假名文選といふ。錠前練物なるの艶冶なれども真の和歌葉なるのでハなし。是和歌先師の雪進あ〳〵て。狂文戯作と書人よハ白氏の文集紫式清少納言。夫かも

勝る至寶なり。夫先生の文章
や活々として龍のめぐり彼庵山
の文選芸笹と。そろう足下り
掛川芸笹詞よ咲きて梅花芸笹
を堅いやうに和らかく。浮世
芸笹の世話よわるぶよれ
ぬ味いとすあるとと。天よりぶ

比翼芸笹の。花ごそげんぐ家
物子。又地よりの連理の枝れ
孫芸笹と塩でも悪ぶよまま
せぶかそぐと世上の戯作者
第後世ぬいで下種芸笹よ
まとつまけ書と抜しく
第世採と我とのの先生

自慢。書〳〵て序文の明也
とふべし。
于時天明八の歳春月吉。
他人出でゝ乃遠を著。
かゝる自よ述之
万象亭

佛法奇瑞 菩提樹之辨 自序

舊板き砌大工行き所〳〵磨滅る及ひ見安
かゝ称バケ様の文章埋木とかるゝ出ゝ
こゝめる人の手まゝ仮名遣ひ小加ふ

或人南無阿弥陀佛の六字を註釋して曰。
そもそも南無とハ南無と書きて文字まて死で
仕義バ皆牙無後生と解くゝ阿弥陀
とハ世の人を救ひ也ふ阿弥陀
めゝ佛振言彩佛とハ念仏と言声を稱る

名算(めいさん)の口の内まそがいくとやせよとのみ
なりと志ろしめ給へ。如来とハ
扨如甲是ハ弘(ひろ)まるのりなるいひ掛り
引(ひき)ものせず。嵯峨(さが)の釈迦(しゃか)でも善光寺
でも開帳ハ出る事ハ元生源(げんしょう)度ハ勿論
なれども二ツハ条皆の散銭(さんせん)をかすらう
加そこで如来こゝとハ一度ゐ笑ひる成
此書の序とハなしける　風来山人誌

安永七年

菩提樹(ぼだいじゅ)之辯(べん)

今年六月朔日より本所回向院(えこういん)ハ
信州善光寺如来の出開帳条皆群集(ぐんしゅう)ス代
未曾ノ多ハ人々ハ知る処なれハ今更いハも
ぐ〳〵。往(ゆく)〳〵日延の日限もこちらるゆや
閏七月十七日の暁(あかつき)限りハ実帳(じつちょう)有る筈(はず)よ
十七日ハ日中より誰(だれ)いひ出(だし)とかく善光寺
如来ハ参(まい)ハ場ハよりて菩提樹を隠し申ふと

我先と見て拾ふ。三十年天開帳の時も降り
あふ又今年もかくしあふハ誠小世ハ流李小
及ぶとへども佛法の奇瑞有がゝ諸人
益渇仰き近ゝ言る共此方より予小見を
監定せよとて見せあふ事七八ケ延ま及ぶり
手皆真の菩提樹なりと答る或日門人
何来掛ゝ問て曰先生彼不と以くきの
菩提樹と答あふ事甚以不穏此言なり夫

菩提樹のるハ翻釋名義集ま体き下に
生ー成等正覚きあふ因て見ゝ菩提樹と
ふとき形状潛確類書ま出り又元亨釈
書ま千光國師栄西入宋の时菩提樹の
種を伝へて筑前國香椎の宮此側ま植ず
京都泉涌寺六角堂同寺町又叡山西塔小
ありと貝原先生大和本州ま詳ま出されり。
又筑後國鎮西本山善導寺中に昔ま大木ま

東都まそハ東叡山の寺中ニ有て先生図紙
考ふるに実大豆粒より大にして色殊ニ作る
拘杞ニ号て菩提樹と云今陸奥ハ麦粒ニ似
何ゝ之考れぬ未ル実て念珠ニ成べ記拘杞も有
す陸奥ハ稀ニ殺生ハ陸奥迎不自由ニ成
掘舊記ニ考ル栗と雨ゝ麦とゝ石とゝ
土とゝ蛇ゝ灰とゝ毛とゝ血と雨ゝ肉とゝ
虫とゝ蛇ゝ魚とゝ蛇ゝ或ハ湯沸紅雪とゝ

皆訳のゝ事なれどつまる処なるハ考ふ弟も佛
の霊形なゝ虚空ニ花陸音楽ハ天津乙女の
羽衣ハ曲ニて諸人の心を感ずるゝ同ゝ陸ずれ
ハ金ゝ麦米なゝ下ハ川ゝ泥絮の虚落ニ雖ゝ
思ふべきニ沒ハ中ゝ近ニ掛て一万ニ成ハ
ニ成て陸ハ閑悟の名誉ニて陸ハ
も立ぬ菩提樹の考ハ賢拘とゝ考ふ
あゝ下げ案ゝ又熟案ずるに日本書記第十九巻

欽明天皇十三年冬十月百濟の聖明王釈迦佛の
金銅の像一軀幡蓋経論ほ[illegible]を献ず小墾田の
家に安置す國に疫氣行はれて治療ふるこ
あるこを物部大連尾輿中臣連鎌子ら奏
して佛像を難波の堀江に流棄つ此説に拠時ハ
実の善光寺如来といハ難波堀江なるこを夫ハ
先差置て釈迦ほとけあれ弥陀ほとけあれ浪花の堀
江へぶちぬきし鄭や鬱とお底の位置ありこれを

川柳点のおの附ほ善光も初を水虎と云ふ居
ほとけるこを後に見て後小八て処こ方こ頂歩行
る佛こ云ふ佛ほとけもせよ一軀まて観音勢至ふるハ
なり是ほとけも又川柳点ほ二菩薩ハ歩りまやいと
本田ついとハ後世三号小作り直せる往掛こ変ひ
る白作こ扱又頂ハ善光如来ほとけ頂衣ハ如来善光
と頂ほとけいふも難ほとけ様あれこ云りとハ
変こ扱仕方こ頂の内書れ旅掛ほとけ頂歩り

罪所作善業悉皆懺悔せば救はるゝ事疑延
て休てこそ旅の労も癒るべけれ救ひの夜一夜金
佛の願れて八眠るすも成ぬべし寄ひ冷
渡つて去ふこと為ら拘感ぜ一切又極楽浄土の
切手成迚浄土へと載うれば地獄極楽を物よ
去てうぐ一生涯佛と慈善根と積てこそ極楽へ
もゆるべりれまさへ上不上生より下不下生ふ為ること
九品の浄土へうちうて往よ極楽へ行とぬと

安しふ去分去メ賣時も去メ百賣時も相場
よ持りて百文で極楽の切手は安賣世智辛ひ
人間ぐも二百出して洗浴と買てはちうの月楽
こそ多り毛生分の百ぜて億万劫ぐ毛宮百味の
飲食振舞も天人を揚詰りて蓮は極小居
侵入うぐの活計飲乗を祇安いりの家い家
一と載て只ま人善ふ八姫よて恵作りこぐる孔美せ
出市文と指ちつそ額よ極市ぐ氏ちつ〜かうハ

つぐもぬ　どんな悪人でも地獄へ落る気遣なと
庶生ん　と安堵させる心孫と　のまぬ　抹茶の判
銭　ふ斗よさ　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
つ色主人の親義めけまくも示くも　ぬ　ふ
る　在の子　ふ　て　表　ふ　所　手　ま　ふ　の　ま　一ツ
そ　て　元　処　も　ま　き　仏　る　ふ　先　生　も　雷　同　し
善　提　樹　ま　り　と　極　る　ふ　の　外　の　ふ　見　歳　言　語
同　形　の　ま　と　ふ　り　切　て　や　る　ま　時　山　人　茫　ふ　と

して笑て曰子ゞ問て理あるふ似ることせ一驚
の論ゝ先日本紀よりふ見善光さても石弥陀と
いい世間一流石弥陀ありと覚て孫石弥陀ゝて
何の邪魔もなくめぬる小刀細工ゝ表紙い
ざるゝ胃折て法界悋気岡焼保表ふ善用
る穿ゝ扱法市文とふるもあさい様あるるか
也ゝ仏とも法ゝ無人ゝ見度ゝ猫ゝ焼
やきゝ人ゝ人ゝの形なゝ仁義礼智ふ百ゝ合ゝ百位

なら極楽へ往てもみようかと思ひ立がそれも迚さん
仁の端佛家でいふ結縁にてめくりに屓て裸に
成より我たる肖ふて鼻を落す狂気の毒とも思
いねすゝ又量ハ菩薩光如来と屓衆ハ如来菩薩光をせ
屓玉ふよハ陰徳あらバ陽報あり菩のむらひ
著く屓へバ屓すといふ比喩成しまから戌
あくたほとを牛馬にむまくる人ハ死で牛る
に成ると佛にむまくある人死て仏に成といふ

君遠もなき物之ね三國傳来の閻浮檀金ハ流て
来て形よ三尊ませし形ハ我の方ハ女郎の名代
をつとめ川ほとくつ手あるへ代は済まする
人多けもうるへあくね閻浮檀金の名代よ新造
如来と呼されるそれも志よんぼりと只一人でハつん
と処が淋しひ成とおしやいの二十五菩薩ハ二人売の
ふと我又閨様の名残狂言いかも花降音楽雪へ
東振びの羽衣の曲がお慰といふやすハ如来をして

唄ふ身の上でもなきなれども、菩薩の
管絃天人の音といふも、やはり昔は国あれ、土佐
の芸者見る様で、素人風なる所より歌舞伎考杜
鵑の子合よりは劣りて、付いそれぬ
出来し立として味噌付れば極楽の様仕舞と
思ふ所、色もさうまと止とこそ。又銀金とふ
らして、江戸中（五千あや七千あで）はどうの
さの人も行屋、出開帳も極楽こそ二歩

銭の〳〵ぢに極〳〵別る仕方う有よとぬ不思議
とさる所小成て思ひ付れ、菩提樹のれ
〳〵合ぬ色色の木実とを報てちやう
うとやうりトハ考ひて元文せめつ宝
上よ有ぐ物も害よたのぐ後人業
なるべ稼様もこれど天物の髑髏 図録で仏の
縁此の可思ふよ。義と云て居るものと我人
知る新はけちと付るもおとのげかと。菩提樹よ

して亜之亮なども議論有やうに所人もあきれ
新すて迫なく恰られぬ山人も聞よのそろ〳〵と
あのご孫さる絶るに和夏人静て後表の戸成
ち〳〵〳〵〳〵〳〵秋鶏の寿もなく節度で
なられ借金元の元寄もなく推と差ご〳〵里
と呼れぬ〳〵掛あき若光寺如来金色光と放
をふ〳〵と招せ西〳〵変八一夏善式〳〵泰〳〵らんと
言ふお処なられども近年雑劇で不法なる成

古〳〵新向笑ぶんご形〳〵に考〳〵化と出掛う
ち方宗ち善提樹の弁茶すこるひまら
を比以て痛入面目もなく況身之句論泰〳〵方
仮で山幸とあふ〳〵て人の目とらまそふとおめ〳〵
竹田の関族出羽の手づま某研堀式飛丈ご工伎
ぐらいいやり蛭もせまひられども正法よあ特有
まも宗旨ご不学りで雅楽よも及ぶ〳〵又思案も
有べられ是流行るてこまつこ位何小不足れのい

仕合菩提樹とふとして人を云ふも及ばず又重て
出る時ハ三四十年も後の事今の人ハ及ばざるまと
ゝ碧れハ記の仕はよも迂遠し殊ハ降せる菩提樹
といふハ其方も考る通り正しの拇でなく倭名水
木又俗よ名まをいへる木の実を鳥が好て喰ふ物
よて彼水木の実の内ハ鳥の腹中でこなつけても
中の核ハ其儘ハ嚢ハ雖りて出るゆ夜ゝの
雨よ紙漂射てそこ寄ハ落て居るを一人ゆ見付

て菩提樹が降ることいへバ百犬表ハ吠るゝ志の書
提樹と形状も遠大きさもちがふゝいふハ流せが
文盲ハ迎め来ともいそる者が産ハよ熟湯浴
やふハ贋物とつゝませふ答ハ愚痴無智の
凡夫ども知れを見員の引九ハ却ゆ恥をかせる
なり成程一図ハ行るものハ嘲も言せよ
かれど千人よ百人も誠の信心て来るハ少く存
目撰菩提樹ハ見せハ来る人見ハ来る人

納涼なども糸竹管弦の遊び
挑灯の伊達お後と事ひ念仏の者達を
人々の数糸・隣のかゝとをの巳門おれ茶や
出会おれを出ふ大それをして日比の恩を
そしらも如来の恩の広蔭を思ひ知らず
身をそゝるゝ心のりせ川おれど一ゝ罰も蒙られず
衰ふ此度の喜捷村の子ハ悲歎涙をぶち
こゝろれというべきの所業をへ泡る法もあれ

おもハ是ハ是ハ思ひ知なり和て世上の習ひ
まて何で暫つこ事が有ば名を立て人の名を立て
牛ゝ切ゝ石ゝ切ゝ弁慶文が捲気ゝの元日の
社文魚武文鰲石芋石輪臼の目切ゝも弘法
大師とあゝまもない名を立ゝられおれも若光寺
の如来ゝいかゝ仏仲間での立ものゝ此度の
喜捷村の振よ。是ハ名を立ゝるも常不沙
ゝゝゝ扱文おれを安ゝして一ケ四ッゝ二人世ゝ

の彩造ゞの様よおもゆるるゝ如成程天竺ゝ渡ゞ
るゝハ観音勢至の脇立なく閻浮檀金ハ
遠おられ奈法の族蠒ひんてうと言て秘佛
ゝて花亟ゝ彩色となる海抱志りせゝゞ名代ゞの
お立のゝ色ゝ理密とゝ称るハ去ゝは其輩千
万なり抑家の善量素仏と申るハ至ってゝ
善ゞてゝ遠ゞてゝ近ゞてゝ学木玉土引合あて
皆ゞ木の細工なれバ慶大善逸いふゝ形

閻浮檀金も焼付も彫形容を標るゞゝり
皆同ゝ前ゝ人ゝの目ゝゝ見れハ金ハ光ゝ
焼付ハ賤ゝい様よゝ見へゝも佛の目より見る時ハ
金も銀も銅も皆一国の土ゝて佛の照ゝ光
明ゝ彩慶大小説時ハ本ゝるも念仏もいゝ儒者
の猶を惜神道者の正直斗て渝ゝ為ゝのの
なれと譬バゝ光稽古ある者ゝびき藁祐斗り
でゝ為おさゝかゝまれバ的よ掛ゝ小及ばゝられる

赤子と赤心で試まへきあてかつまつしら
かつまつさるゝ委ふ多数的に的に掛て射て
又れば今の矢ハ上ごとごと的と同当まあを
乗八年学ぶ向て念仏一悪念を去て若ふ
立つるも彼的と対んして閻浮檀金でも焼付
でも同当斗れまれば貪慾ハなれまあり
凡人の力を慾弓は強くも弱くもなれ的ハ
金でも焼付でも一心不乱ふ弦ハ風ゆんで

埃なく浪静て水清し悪念邪念の去ぬ時て礎子
のごとく生れ出れば即火珠して誠の如来うゝ
せ玉へば其時悟を開なりこの玉ふあるを真〳〵ハ
是も赤鼻して如来と又〳〵ハ有的の行跡迹よ
ちつて求ハ知のごと明よりり

跋

去ぬ方善光寺の縁起と呼玉い根ハ如来善光と

員ありといふる論して宮ふるハ閻浮檀金成る像ハ
小像なるより善光ぐ天人の髏と二寸八分まておひ
ありとい玉ふ以ていはゞ或人答へて云ふ伝の通
力まて寸八分ハ成る像と立ても七尺ハ成る
ありといへども合ひ玉ハゞ法通力自立なるハ
成像ゝて員ん力ハ竹裏と腹ふ仏なるべし
訓智恵のあ記ぬ来ふて元生海茂ハ見来ありと
或人みやりるハ二度竹裏も借ふ地ぐ善光寺縁起と

指さればあんず仏の通力でも柿の帯で公ふ世ぐ爾時
如来ぬ小言ふ曰嗚呼誠なる記元生ハ度ーぐと門人
世安時也

115475